

ライノウイルス C は小児の繰り返す喘鳴

- 1) ライノウイルスは RS ウイルスに次いで多い下気道感染症の原因ウイルスです。重症の細気管支炎の 20~40%がライノウイルスです。
- 2) 2011~2014 年間の秋から冬にかけて RS ウイルスかライノウイルス (A,B,C 型) に感染して細気管支炎を起こし入院した 1 歳以下の乳児 716 名を登録しました。そして反復性の喘鳴の病歴を 3 歳まで調査しました。
- 3) 入院した 716 名の中、RS 単独は 76%、ライノ A 型は 12%、C 型が 11%、B 型が 2%でした。
その中で 3 歳時に反復性喘鳴と診断された幼児は 32%です。
その危険度を RS ウイルスと比較して調べますと、
ライノウイルス C が 1.58 ライノウイルス A が 1.27
ライノウイルス B が 1.39
つまり細気管支で入院する乳幼児は RS ウイルスが一番多いのですが、その後反復性喘鳴をきたす場合はライノウイルス C が一番危険との結果です。
- 4) ライノウイルス C は喘息と関係する免疫グロブリン E の感化と深く関係していました。その結果、RS ウイルスを 1 として比較しますと、食物アレルギーの危険率は 3.03 で 4 歳での喘息の罹患の危険率は 4.06 と高率です。
- 5) ウイルス感染と免疫機能変容のメカニズムは今後の興味あるテーマです。

ライノウイルスに関して少し Red Book で纏めてみますと、

- 1) 感冒の主たるウイルスです。
咽頭炎、中耳炎、下気道感染（細気管支炎、肺炎）を起こす。
最初の症状は、咽頭痛、鼻炎（最初の数日は水様性ですがやがて膿性となり 2 週間も続く）
頭痛、筋肉痛、咳、喘鳴、クシャミも起こる。高熱はまれ。
- 2) 喘息をもった幼児で喘息症状の増悪の原因の半分はライノウイルスである。
- 3) ライノウイルスには A,B,C の 3 種類の型と serotype は約 100 種類ある。
1 年中流行しているがそのピークは春と秋。
いろいろな serotype が同時に流行しているがある地域では特定な serotype が優位に流行し、それは年度により変化する。
成人になるまでに多くの serotype に対する抗体が獲得されてくる。
- 4) ウイルスの排出は 2~3 日が一番多いが一般的には 7~10 日で休止する。
しかし 3 週間も続くこともある。
- 5) 潜伏期は 2~3 日だが時に 7 日までの場合もある。

